羅什訳『法華経』の語学的研究

－“何”について－

椿　正美

0．はじめに

古漢語の疑問代名詞には“誰”“安”“悪”“焉”“何”“胡”“曷”“奚”等があり、高名凱1957は指示対象として「人」「事物」「方位」「原因」「時間」「方式或状態」「数目」を掲げている。張玉金2004は、現存する多くの文献に於ける人称、指示、疑問の各代名詞の収録状況を根拠として、人称代名詞と指示代名詞の二系統は殷代（紀元前14世紀～紀元前11世紀）には既に存在していたが、疑問代名詞は西周時代（紀元前11世紀～紀元前771年）に加わった新しい系統に当たると述べている。

疑問代名詞の中で最も使用範囲が広いとされる“何”は、上記の項目の中では「人」「事物」「方位」「原因」「時間」を対象とする類に含まれる。使用時期について言えば、殷墟の甲骨文、西周時代の甲骨文や金文には見られないが、同時期に書かれた中国最古の詩集『詩経』には見られることから、張玉金2004は“何”が西周時代に広く使用されていたとの可能性を指摘している。

牛島1967は、古典漢語の〈質疑文〉について、話し手が聞き手に回答を期待する「質問」と回答を期待しない「疑惑」に分類している[1)]。この分類法に従えば、“何”は「質問」中の主語、述語、目的語、限定、前置詞句に単独使用される疑問詞、他の語彙との連用により修飾、限定、補足として使用される疑問詞に当たる[2)]。

例えば『韓非子』「初見秦」“占兆以視利害、何国可降（「兆を占ひて以って利害を視る、何れの国に降る可きかと」）。”の“何国”は、普通名詞“国”と連体修飾語“何”との連用と捉えられ、後者の機能が発揮されたと判断される。同様の機能が発揮された“何”は仏典にも多く見られ、『法華経』“是妙音菩薩、種何善根、修何功徳、有是神力。”（妙音菩薩品）の“何善根”“何功徳”が使用例として挙げられる。

本論では、調査範囲を鳩摩羅什訳『法華経』に限定し、文中で用いられた疑問代名詞または副詞“何”の単独使用、更に他語彙との連用による様々な形式の使用状況を通じて、“何”に含まれた機能の特徴について探っていく。尚、“何”の指示対象の名称については、上記の高名凱1957に記されたものを適切であると判断し、本論に於いてもこれを使用する。

1．“何”の単独使用

単独で使用される“何”は、主語、述語、目的語、修飾語として文中に配される。牛島1967は『史記』に於ける“誰”“執”“何”の主語としての使用例が極めて少ないことを指摘しているが、『法華経』では主語としての“何”は全く見られない。

本章では、『法華経』に於いて単独使用された“何”の述語、目的語、修飾語（連用修飾語、連体修飾語）としての機能について述べる。

1．1．述語としての使用

述語としての“何”は、例えば『荀子』「王覇」“人無百歳之寿、而有千歳之信士何也（「人百歳の寿無くして千歳の信士有るは何ぞや」）。”では、話し手が聞き手に対して返答を要求する形式の構成に用いられ、その対象の種類は、既に掲示された分類では「原因」に当たる。「原因」を対象とする述語“何”の使用は、同じ『荀子』の「非相」“人之所以為人者何已也（「人の人たる所以の者は何ぞや」）。”にも用いられ、そこでは〔“～”＋“所以”＋“～”＋“者”〕を主部とする表現“所以者何”が構成されている。

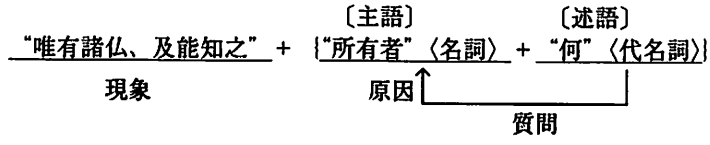
『法華経』に於いて用いられた述語“何”は、全てこの“所以者何”に含まれ、全文中に合計50回の使用が確認される。次に使用例を挙げる。

(1)唯有諸仏、及能知之、所以者何。（方便品）

(2)諸衆生等、易可化度、無有疲労、所以者何。（従地涌出品）

例文中、話し手が聞き手に「原因」を尋ねる現象の内容には、(1)では“唯有諸仏、及能知之”、(2)では“諸衆生等、易可化度、無有疲労”がそれぞれ当たる。(1)の構成を図式化すると図1のようになる。

図1



“所以者何”に含まれる“何”の対象は、全体の文意から「原因」と捉えられる可能性もある。しかし、「原因」に当たる部分は主語“所以（者）”であり、その内容について尋ねる部分に当たる述語“何”自体の対象は「事物」と解釈される。

1．2．目的語としての使用

目的語としての“何”を含む表現は、『法華経』では条件や方式等の掲示に用いられる前置詞“以”の後続によって構成された“何以”が例として挙げられる。この表現では、本来なら

ば目的語の直前に置かれる"以"が倒置によって"何"直後に置かれ、〔"何" + "以"〕が構成されている。

"何以"に含まれる"何"自体の対象は、『墨子』「尚賢」"何以知尚賢之為政本也（「何を以って賢を尚ぶの政の本為るを知るや」）。"とあるように「方式或状態」と捉えられる。但し、『法華経』では原因や理由を示す"故"の後続によって〔"何以" + "故"〕が構成され、それ以前の部分に掲示された内容の「原因」を聞き手に尋ねる表現に用いられている。この表現は合計4回の使用が確認される。次に使用例を挙げる。

(3)非為虚妄、何以故。（譬喩品）

(4)初説三乗、引導衆生、然後但以大乗、而度脱之、何以故。（譬喩品）

例文中、"何以故"によって聞き手が「原因」を尋ねられる行動には、(3)では"非為虚妄"、(4)では"初説三乗、引導衆生、然後但以大乗、而度脱之"がそれぞれ当たる。(3)の構成を図式化すると図2のようになる。

図2

〔目的語〕

"非為虚妄" + {〔"何" + "以"〈前置詞〉〕 + "故"}

現象　　原因

同様の表現では、前置詞"由"との併用によって構成された"何由"の使用も1例確認される。この表現は行動の実現に必要な条件を聞き手に尋ねる表現として用いられ、『孟子』「梁恵王章句」"何由知吾可也（「何に由りて吾が可なるを知るや」）。"等に使用例が見られる。次に『法華経』での使用例を示す。

(5)何由能解、仏之智慧。（譬喩品）

(5)では"能解、仏之智慧"が行動の内容に当たる。"何由"が直前に置かれて、必要な条件を尋ねる表現が構成され、"何"の対象は「方式或状態」と解釈される。

以上のように、目的語"何"は「原因」または「方式」を対象とする場合が多い。しかも、述語"何"を含む場合と同様、目的語"何"を含む場合も、前置詞その他の語彙との併用により、「原因」を聞き手に尋ねる表現を構成している。

1．3．連用修飾語としての使用

古漢語に於ける連用修飾語の使用状況に関して、牛島1967は漢代以前に於ける"何""奚""胡"等の借用による表現の可能性を指摘している。"何"の使用例には『孟子』「梁恵王章句」"王何必曰利、亦有仁義而已矣（「王何ぞ必ずしも利と曰はん、亦仁義有るのみ」）。"等が挙げられ、文中の"何"は以下の部分に掲げられる動詞を修飾する副詞となる。

但し、『法華経』文中では連用修飾語となる副詞"何"の使用例は極めて少なく、合計2例

のみである。次に使用例を挙げる。

(6)仏滅一何速。(序品)

(7)是人執我、必当見我、何用衣食、使我至此。(信解品)

(6)では直後の部分に掲示された内容の程度を示す副詞“何”が用いられ、感嘆文が構成されている。ここでは数詞“一”が“何”直前に置かれて構成された表現〔“一”＋“何”〕の直後に形容詞“速”が置かれ、“仏滅”の速い様子が強調されている。図式化すると、図3のようになる[3)]。

図3

〔主語〕　　〔修飾語〕　　〔述語〕
“仏滅”＋｛“一”＋“何”〈副詞〉｝＋“速”〈形容詞〉
程度の強調

(7)では“是人執我、必当見我”が話題の背景となり、“用衣食、使我至此”の必要性を聞き手に尋ねる形式が構成されている。副詞“何”は動詞句の直前に置かれ、文体は反語形となっている。

1．4．連体修飾語としての使用

連体修飾語としての“何”は、対象に当たる条件を含む名詞の直前に置かれ、〔“何”＋名詞〕を構成する。本節では、対象が「事物」「方位」である場合、更に〔“何”＋名詞〕全体が「原因」を示す場合の連体修飾語“何”の機能について述べていく。

1．4．1．「事物」と「方位」

「事物」を対象とする“何”が含まれた〔“何”＋名詞〕には、既に掲示した“何善徳”“何功徳”等が当たる。また、連体修飾語“何”には「方位」を対象とする場合もあり、単独では“安”“悪”“焉”が多用される表現に、『法華経』文中では“何”の直後に方位または地点を示す語彙が置かれる形式が用いられる。これには“何地”1回、“何所”5回を含む合計6回の使用が確認される。

次に「事物」「方位」を対象とする表現の使用例を挙げる。

(8)是菩薩、住何三昧、而能如是、在所変現度脱衆生。(妙音菩薩品)

(9)衆生所楽見、為従何所来。(従地涌出品)

1．4．2．「原因」究明の表現への変化

この他、連体修飾語“何”を含み、「原因」の究明に用いられる〔“何”＋名詞〕では“何因

縁”の使用が多く見られ、合計17回の使用が確認される[4]。次に使用例を挙げる。

⑽以何因縁、我等宮殿、有此光曜。（化城喩品）

⑾世尊是何因縁、先現此瑞。（妙音菩薩品）

この表現に含まれる“何”の本来の対象は、前述の例と同じく「事物」である。但し、原因や理由を示す“因縁”の後続によって構成されているので、前部の掲示内容の「原因」を尋ねる表現に応用されたと捉えられる。

同じような形式によって構成された例では、他には“故”が後続した“何故”が挙げられる。王力1954は「原因」を尋ねる表現として既に掲示した“何以”やこの“何故”を挙げているが、漢代以前には同じ意味の表示に“何”“奚”“胡”等が常に借用されていたと指摘している。『墨子』「尚同」“何故以然、則義不同也（「何の故を以って然るや、則ち義同じからざればなり」）。”等に使用例が見られる。

この“何故”は全文中に合計８回の使用が確認される。次に使用例を挙げる。

⑿其劫名大宝荘厳、何故名曰大宝荘厳。（譬喩品）

⒀何故憂色、而視如来。（勧持品）

この表現は、本論に於いて既に掲示した“何以故”から前置詞“以”が削除された形式となる。当然、両形式に於いて発揮される“何”の機能は異なり、“何以故”では“何”に含まれる目的語、“何故”では連体修飾語としての機能が発揮されたと捉えられる。

以上、単独によって用いられた疑問代名詞または副詞“何”の述語、目的語、修飾語としての使用状況を記し、それぞれの指示対象について述べた。調査の結果、“何”自体の対象は様々であったが、“何”を含み構成された表現は聞き手に対する「原因」究明を目的とする種が多いことが判明した。

本章で掲示した表現の中で「原因」究明を目的とする“所以者何”“何以故”“何因縁”“何故”の『法華経』本文中に於ける使用回数について《表１》を作成した。

《表１》

	所以者何	何以故	何因縁	何故
序品	0	0	3	2
方便品	9	0	2	3
譬喩品	5	3	0	1
信解品	7	0	0	1
薬草喩品	2	0	0	0
化城喩品	2	0	6	0
五百弟子受記品	1	0	0	0
法師品	3	1	0	0
見宝塔品	0	0	1	0

	所以者何	何以故	何因縁	何故
提婆達多品	1	0	0	0
勧持品	1	0	0	1
安楽行品	3	0	0	0
従地涌出品	2	0	1	0
如来寿量品	4	0	0	0
分別功徳品	1	0	0	0
常不軽菩薩品	1	0	1	0
如来神力品	2	0	0	0
嘱累品	1	0	0	0
薬王菩薩本事品	1	0	0	0
妙音菩薩品	0	0	1	0
観世音菩薩普門品	0	0	2	0
妙荘厳王本事品	4	0	0	0
合　計	50	4	17	8

2．複合語の形成

“何”を用いる表現方法には、単独使用だけでなく、既に述べたように他語彙との連用による複合語としての使用も含まれている。本章では、『法華経』文中に見られる複合語、〔～＋“何”〕の構成による“云何”“如何”、〔“何”＋～〕の構成による“何況”の使用状況について述べる。

2．1．云何

『法華経』で使用される“何”を含む複合語では、助詞“云”との連用によって構成され、連用修飾語、述語として用いられる“云何”の使用が最も多く、全文中では合計40回の使用が確認される。

“云”は元来、状態や程度等を示す指示代名詞として使用されたが、後には句首や句末に設置される助詞に発展した。先秦時代には疑問代名詞“何”“誰”“胡”の直前に置かれた表現が多用され、やがて複合語“云何”が形成されたとされる[5)]。

本節では、“云何”使用の中で最も多い連用修飾語、述語としての使用状況について述べる。

2．1．1．連用修飾語としての使用

連用修飾語としての“云何”は、対象が高名凱1957の認める「方式或状態」に当たり、『法華経』では20回使用されている。次に使用例を示す。

⑭此中云何、忽生衆生。（化城喩品）

⑮世尊云何、於此少時、大作仏事。（従地涌出品）

各例文に見られる“云何”修飾の対象となる部分には⒁“忽生衆生”⒂“於此少時、大作仏事”が当たる。“云何”はそれぞれの実現を導く条件について尋ねる表現となり、尋ねる内容は「方式」（手法）と解釈される。

また、連用修飾語“云何”は、話し手が希望または推測を拒む行動や状態の表現の直前に置かれて反語形も構成する。使用例は『詩経』「揚之水」“既見君子、云何不楽（「既に君子を見れば、云何ぞ楽しまざらん」）。”等に見られる。この形式は合計７回の使用が確認される。次に使用例を挙げる。

⒃云何捨大珍宝、而欲退還。（化城喩品）

⒄女身垢穢、非是法器。云何能得、無上菩提。（提婆達多品）

各例文に見られる“云何”は、⒃“捨大珍宝、而欲退還”⒄“能得、無上菩提”の発生に対する否定の意志を示し、反語形を構成している。⒄の構成を図式化すると図４のようになる。

図４

〔修飾語〕

“女身垢穢、非是法器”（背景）＋｛“云何”＋“能得、無上菩提”｝（疑惑）

２．１．２．述語としての使用

述語としての使用例は『史記』「司馬穰直列伝」“軍法期而後至者云何（「軍法に期して後れて至る者は云何」）。”等に見られ、その対象は「方式或状態」と解釈される。『法華経』では12回の使用が確認される。次に使用例を挙げる。

⒅諸善男子、於意云何。（如来寿量品）

⒆方便之力、其事云何。（観世音菩薩普門品）

⒅の表現“於意云何”は全文中に３回用いられ、他には二人称代名詞“汝”が挿入された形式“於汝意云何”７回、同複数形が挿入された形式“於汝等意云何”１回の使用が確認される。何れの場合でも「方式」を対象とする“云何”が文末に置かれ、現状に対する意見を聞き手に尋ねる形式が構成されている。

２．２．如何

“何”を含む複合語では、前置詞“如”との連用による“如何”も挙げられる。王力1954は、質問の表現として用いる“如何”または“何如”の対象に「方式」は含まれるが「原因」は含まれず、「原因」を対象とする場合には“何以”“何故”等が用いられていたと指摘している。

この“如何”は、『法華経』全文中では使用例が極めて少なく、合計2例のみである。次に使用例を示す。

⑳死時将至、癡子捨我、五十余年、庫蔵諸物、当如之何。(信解品)

㉑此輩甚可愍、如何欲退還、而失大珍宝。(化城喩品)

⑳では、複合語として構成された〔“如”＋“何”〕の中間部に“庫蔵諸物”を示す代名詞“之”を挿入させることにより、同事物の処理方式を聞き手に尋ねる形式が構成されている。この〔“如”＋指示代名詞＋“何”〕は『論語』「先進」“仍舊貫如之何、何必改作(「舊貫に仍らば之を如何、何ぞ必ずしも改め作らん」)。”に使用例が見られる。

また㉑では反語の形式が構成され、“欲退還、而失大珍宝”に対する話し手の心情が強く表示されている。

⑳㉑何れの場合も“何”の対象は「方式」と解釈される。

2.3. 何況

『法華経』文中では、副詞“何”と接続詞“況”との連用による接続語“何況”も多用されている。この表現に関して、太田1958は「等立句に用いる連詞(接続詞)」の中で並列を示す表現と指摘し、開始時期を後漢時代(25年～220年)に定めている。また、構成については「前の句を承けていうのであって、かならずしも前の句とあわせ複句(複文)をつくるとはいえない」と述べている。

『淮南子』「原道訓」“欲害之心亡於中、則飢虎可尾、何況狗馬之類乎(「害せんと欲するの心、中に亡ければ、則ち飢虎も尾ず可し、何ぞ況や狗馬の類をや」)。”等に使用例が見られる。『法華経』では15回の使用が確認される。次に使用例を示す。

㉒十方世界中、尚無二乗、何況有三。(方便品)

㉓以我此物、周給一国、猶尚不匱、何況諸子。(譬喩品)

㉒では“十方世界中”が話題の背景となり、条件“尚無二乗”の説明として“有三”が加えられ、“何況”は二つの条件を関連させる機能を発揮している。同様に㉓では“以我此物、周給一国”が背景となり、“猶尚不匱”“諸子”が二つの条件に当たる。

㉒の構成を図式化すると図5のようになる。

図5

〔修飾語〕

“十方世界中”＋｛“尚無二乗”＋“何況”＋“有三”｝

背景　　条件①　　条件②

以上、“何”を含む複合語“云何”“如何”“何況”の使用状況を記し、それぞれの機能について述べた。調査の結果、三種類の中では“云何”の使用回数が最も多く、用法も豊富であることが判明した。この他、『法華経』文中では「提婆達多品」“仁往龍宮、所化衆生、其数幾何。”に用いられた、「数目」を対象とする“幾何”が同様の複合語として挙げられる。

“云何”“如何”“何況”の『法華経』本文中に於ける使用回数について《表２》を作成した。

《表２》

	云何	如何	何況
方便品	3	0	1
譬喩品	4	0	2
信解品	0	1	0
薬草喩品	3	0	0
化城喩品	3	1	0
授記品	1	0	0
法師品	1	0	2
見宝塔品	1	0	0
提婆達多品	2	0	0
勧持品	1	0	0
安楽行品	3	0	1
従地涌出品	4	0	0
如来寿量品	1	0	0
分別功徳品	0	0	2
随喜功徳品	1	0	5
常不軽菩薩品	2	0	0
嘱累品	2	0	0
妙音菩薩品	1	0	0
観世音菩薩普門品	4	0	0
陀羅尼品	1	0	1
妙荘厳王本事品	1	0	0
普賢菩薩勧発品	1	0	1
合　計	40	2	15

３．おわりに

本論では、『法華経』文中で使用された“何”の機能について、単独使用での使用状況と複合語を構成しての使用状況を通じて述べた。調査の結果、単独で用いられた“何”は、例えば述語として用いられた“所以者何”、目的語として用いられた“何以故”、連体修飾語として用いられた“何因縁”“何故”では、仮に本来の対象が「原因」とは異なる場合でも、その何れもが他語彙との併用を経て、行動や状態の発生の「原因」を尋ねる語彙として機能を発揮していることが判明した。

この点から見れば、『法華経』では「原因」を対象とした疑問代名詞を含む文体の多用が特徴として認められることも可能となる。特に全文中50回も使用された“所以者何”は、『法華経』

独特の表現形式とも捉えられる。

また、複合語では“云何”の使用が最も多く、用法も豊富であった。同じく「方式」を対象とする“如何”との間に使用回数では大差を見せることから、やはり『法華経』の内容に適した表現として解釈される。

唐代には、疑問代名詞“何”に該当する口語体の表現として“什麽”“甚麽”が発生した。これらの語彙は現代漢語に於いても常用されている。また、連用修飾語となる副詞“何”に該当する語彙では、「原因」を対象とする場合は“為什麽”、「方式或状態」を対象とする場合は“怎麽”が現代漢語の中で用いられている。

これに対し、古漢語の〈質疑文〉に於いて用いられた“何”は、主語、述語、目的語、修飾語としての幾つかの機能を単独で発揮し、使用条件も豊富であるため、表意能力に柔軟性が伴っていると考えられる。その柔軟性については、本論でも述べたように、仏典『法華経』に見られる使用例からも十分に認識できる。

〈註〉

1) 同書では〈質疑文〉の他に〈命令文〉の存在が指摘されている。

2) 一方の「疑惑」では、容疑を示す疑問詞として“誰”系“安”系“何”系が設定され、“何”系には“何”の他、“胡”“奚”“曷”が含まれている。

3) 通常、“一何”は複合語と解釈され、本来ならば次章にて扱うべき表現であるが、単独で連用修飾語として用いられる副詞“何”自体の機能、特に程度の強調について述べる場合にも、“一何～”の使用例は参考のため引用するに相応しいと判断し、本章にて表示した。

4)「方便品」に“世尊何因何縁、慇懃称歎・・・”とあるが、文中の“何因何縁”の部分は“何因縁”を2回使用したとして処理した。

5) この部分は段徳森1990を参照した。

〈参考文献〉

牛島徳次1967.『漢語文法論(古代編)』。大修館書店。

太田辰夫1958.『中国語歴史文法』。江南書院。

王力1954.『中国語法理論』。中華書局。

王力1958.『漢語史稿』。中華書局。

高名凱1957.『漢語語法論』。科学出版社。

段徳森1990.『実用古漢語虚詞』山西教育出版社。

張玉金2004.『西周漢語語法研究』。商務印書館。

【キーワード】疑問代名詞
副詞
複合語
質問
修飾語